論文 チタンロッド内部挿入陽極方式による電気防食工法の 桟橋上部工への適用性に関する研究

田中 英紀*1・宮添 憲昭*2・小川 文生*3・阿部 正美*4

要旨:本研究では、チタンロッド内部挿入陽極方式による電気防食工法を桟橋上部工に適 用するに当たり、劣化部である下面に陽極を設置する従来方式と上面から設置する方式と を模擬試験体を用いてその効果を比較検討した。その結果、上面からの設置方式は、従来 設置方式と同等な防食効果を得るには2倍程度ロッド数が増加するが、足場を含む仮設材 費の軽減や陽極設置の施工性向上が図れるため、補修コストを従来方式と同等程度にでき る場合があり、桟橋上部工への適用が期待できることが判明した。

キーワード:電気防食,内部挿入陽極方式,桟橋上部工,陽極設置方法

1. はじめに

一般に電気防食工法は、外部電源方式と流電 陽極方式に大別され、コンクリート構造物には 前者の適用例が多い。さらに、外部電源方式に はチタンメッシュ方式、チタングリッド方式、 導電性塗料方式、内部挿入陽極方式があり、各 構造物の劣化状態や立地条件等を考慮して、最 適な方式が採用されている。¹⁾

桟橋上部工の塩害による劣化は,海象条件上 飛沫帯となる下面に集中し,より効果的な防食 効果を得るために,下面に陽極を設置する方式 を採用している(以下,従来方式と称す)。しか し,従来方式では鋼管杭を利用した仮設足場を 必要とする上,補修工程が潮位によって制限さ れる場合が多い。

そこで、本研究では制約条件をできるだけ低 減できる上面からの陽極設置方式に着目し、桟 橋を模擬した試験体の防食実験結果から、従来 方式と同等の防食効果を得るロッド本数や設置 位置を設定した。また、補修コストを両方式で 比較検討し、上面設置方式が従来方式と同等程 度になることを確認した。

2. 実験概要及び計測手法

2. 1 試験体概要

試験体は, 桟橋上部工の床版を模擬して, 幅 800mm, 長さ1,000mm, 厚さ300mmの平板と し, 下面への塩分浸透を考慮して300mmの部 材厚のうち, 下段150mm領域は15kg/m³のNaCl を混入したコンクリートを用いた。

表-1に使用したコンクリートの配合表と材料一覧を示す。

表-1 コンクリート配合表と使用材料

水セメント比 ₩/C(%)	細骨材率 S/a(%)	スランプ (cm)	空気量 (%)	設計基 N/	準強度 mm ²
55.0	43.3	8.0	4.5	24	
単位量 (kg/m ³)					
水	セメント	細骨材	粗骨材	NaC1	混和剤
157.0	285.0	789.0	1083.0	15.0	3.05

セノ	シ	ト種類:		普	通ポルトランドセメント
細	傦	材	種	類:	砂(陸砂)
			産	地:	千葉県富津市横山産
粗	傦	材	種	類:	砕石2005
			産	地:	栃木県安蘇郡葛生町

なお,鉄筋はφ13mm を幅方向に 200mm 間隔

- *1 五洋建設㈱技術研究所係長 工修(正会員)
- *2 東興建設㈱電気防食プロジェクトリーダー
- *3 ㈱東京興業貿易商会建材設備営業部第一建材課

*4 港湾空港技術研究所構造部防食主任研究官 工博(正会員)

で上下2段に計8本配置した。また、試験体は チタンロッド陽極の挿入方式による相違を相対 比較するために2体作成した。その概略構造図 を図-1に示す。



試験体構造図(単位:mm) 図-1

次に, チタンロッドは, NaCl を混入したアノ - ド側から挿入したケース1(従来方式)と NaCl を混入していないカソード側から挿入し たケース2(上面設置方式)の2ケースとし, その長さは、NaClの有無領域のどちらかに収ま るように 100mm に調整した。図-2にチタン ロッドの平面配置図を示すが,両ケース共にロ ッドの平面配置は同一とした。表-2に各試験 体の分割鉄筋位置での計測点対応表を示す。





表-2 各試験体計測点対応表 ケース1 ケース2 • C23 0 0 0 0 断面図 • C13 C21 o ^{C14} C24 C12 ο 0 0 側面図 ケース ケース 1 2 分割番号 鉄筋番号 分割番号 鉄筋番号 C 1 1 $1 \sim 5$ C 2 1 $1 \sim 5$ C 2 2 C 1 2 $1 \sim 5$ $1 \sim 5$ C13 $1 \sim 5$ C 2 3 $1 \sim 5$ C 1 4 $1 \sim 5$ C 2 4 $1 \sim 5$

注) C111 は C11 鉄筋の1番目の分割鉄筋を示す。

ものをエポキシ樹脂で連結し、全てを短絡すれ ば電気的に一本の鉄筋となる分割鉄筋²⁾と一本 鉄筋を比較できるように配置した。

2.2 実験環境条件

作成した2試験体は、港湾空港技術研究所の 暴露試験場に設置し、桟橋の環境条件を考慮し て、試験体の NaCl を混入した側に海水シャワ ーが噴射する環境下とした。図-3に海水シャ ワーサイクル時間を示す。



2.3 測定項目

本実験で行った測定項目一覧を表-3に示す。 なお、照合電極はチタン製を用いており、自然 電位計測結果は、CSE 換算している。

表一3 測定項目				
測定項目	計測頻度	ケース1	ケース2	
電源電圧	連続	0	0	
電流	連続	0	0	
自然電位	通電前	0	0	
防食電位	連続	0	0	
復極量	適時	0	0	
鉄筋電流値	連続	0	0	
温度湿度	1時間毎	0	0	
備考	備考計測頻度は適宜見直す			

2. 4 通電方法

本実験における通電方法は、陽極をチタンロ ッド、陰極を分割鉄筋及び一本鉄筋とし、外部 電源方式の定電圧制御による通電を行った。図 -4に分割鉄筋の通電回路図を示す。

3. 実験結果と考察

3.1 通電前の初期状態

通電前の分割鉄筋の初期状態を把握するため に、自然電位測定を行い、ASTM 基準³⁾で分類 した。図-5と図-6にその結果を示すが、両 試験体ともに NaCl を混入した側の鉄筋は腐食 している状態で,一部端部の分割鉄筋を除けば、 同一の初期条件であったと推定できる。

表一4 腐食判定基準 3)

ASTM C876 (腐食の判断基準)	照合電極:チタン電極 下記値:CSE換算済
-200mV以下(CSE)	90%以上腐食無し
$-200 > E \ge -350 \text{mV}$	不確定
-350m以上	90%以上腐食有り

C143 -525 C142 -512 C141 -542 C145 -523 C144 -514 1.1 T.T C134 C133 -255 C132 C131 -397 C135 -345 ŦĦ **TTT** ŦŦ TT C125 -496 C124 C123 C122 C121 C114 C113 -241 C112 C111 -497 C115 -488

図-5 自然電位分布 (ケース1:単位(mV))







図-4 通電回路図

3.2 印加電圧による影響

平面的に5本配置したチタンロッドのうち, 中央部の③のみに(図-2参照)3,4,5V の電圧を印加した場合の結果を次頁の図-7, 図-8,図-9及び図-10に示す。

ケース1の場合,ロッド近傍の分割鉄筋の復極 量が大きくなる傾向を示している。印加電圧に よる復極量は3Vと4Vでは,電圧比率に応じ た復極量分布を示すが,5Vではロッド近傍以 外ではその影響が小さいことがわかった。理由 のひとつとして、今回設置した 100mm のロッ ド長では、4 V程度の印加電圧が防食効果の上 限であることが考えられる。

また、本ケースでは、1本のロッドで試験体 全体の鉄筋に対して、防食効果が期待できる 100mV以上の復極量を示した。このことはマク ロセルのアノード側に陽極を設置する方が効果

-- 363 --





図-7 復極量分布(ケース1)



図-8 電流密度分布 (ケース1)

一方,ケース2では、印加電圧の影響はケース1と同様、3V及び4Vでは電圧比率に応じて復極量は増加し、5Vではほとんど変化しなかったが、全体的にケース1の1/3程度の復極量分布となった。また、電流密度もケース1よりも小さく局部的に負となる箇所もあった。

以上の実験より、ケース1では防食効果が期 待できる 100mV 復極量は満足するものの、電 流密度については両ケースともに負、あるいは 零となる分割鉄筋が存在することから、中央部 ③1本のみの陽極設置(図-2参照)では試験 体全体を十分防食できないものと判断した。



3.3 ロッド本数による影響

従来方式(ケース1)と上面設置方式(ケー ス2)について、効率的な防食効果が得られる ロッド配置を確認するために、以下の表-5に 示すロッド配置で電圧を印加して復極量及び電 流密度を測定した。本実験では、全ての分割鉄 筋の復極量が100mV以上で、かつ電流密度が 正となる最小陽極数配置の場合が各ケースで最 も効率的な防食効果が得られるロッド配置パタ ーンの条件として設定した。なお、本実験での 印加電圧は、全て3Vとした。

表-5 最適配置確認実験一覧

従	実験ケース	ケース1-1	ケース1-2	ケース1-3
来	使用	1	4	1 4
方	ロッド	3	3	3
式	番号 注)	2	2	25
上	実験ケース	ケース2-1	ケース2-2	ケース2-3
面	使用	1	4	1 4
設	ロッド	3	3	3
置	番号	2	2	2 5

注)各丸数字は、使用したロッドを表示する。 詳細位置関係は図-2を参照のこと。



図-11 復極量分布(従来方式)



図-12 電流密度分布(従来方式)

従来方式では、ケース 1-1 とケース 1-2 の3 本の陽極を用いた場合が条件を満たす最小ロッ ド数であるが、ケース 1-1 の場合、試験体の隅 角部での電流密度が小さくなるため、ここでは ケース 1-2 を従来方式の最適配置とした。



図-13 復極量分布(上面設置方式)



図-14 電流密度分布(上面設置方式)

上面設置方式ではケース 2-3 の5本陽極の場 合のみが条件を満足するので、これを上面設置 方式の最適配置とした。

復極量は、両方式ともに陽極設置付近が大き くなり、陽極から離れるに従って小さくなる傾 向を示した。一方、電流密度は、一部の鉄筋を 除いて自然電位との相関が認められた。即ち、 90%以上の確率で腐食がありと推定された分 割鉄筋の電流密度は大きく、不確定と推定され た分割鉄筋は小さくなる傾向が確認された。 NaCl を混入しなかった側の鉄筋表面には不動 態皮膜が存在し、防食電流が小さくても効果が 得られていることが推定された。⁵

4. 補修コスト比較

次に,外観上のグレードでⅡ-1(加速期前 期⁶)に相当し,電気防食と断面修復を併用し た揚油桟橋の補修例を基に,チタンロッド陽極 を従来方式と上面設置方式に適用した場合の補 修コスト比較を行った。

コスト比較の前提条件は、①各方式の陽極設 置数は、今回の実験結果を基に従来方式の3に 対して、上面設置方式を5の割合で配置した、 ②項目は、補修コストに占める割合の大きなも のに着目した、③断面修復を併用する状態(外 観グレードII-1(加速期前期))⁶⁾程度と軽微 な劣化状態(外観グレードI-1(潜伏期))⁶⁾ 以前で補修を実施した場合を対象とした、④補 修コストが最も大きい場合を基準とし、他の例 はこれに対する比率として提示した。図-15 にコスト比較結果を示す。



図-15 補修コスト比較例

同図より,劣化が進展した場合は,両方式の どちらを採用しても補修コストが増大すること がわかった。しかし,劣化が軽微な場合は,コ ンクリートのはつりや断面修復を必要としない ため,コストを大きく低減できる。この結果は, 補修は劣化が軽微な段階で実施することがコス ト面で最も有効であることを反映している。

また,従来方式と上面設置方式との比較では, ほぼ同等の補修コストであることがわかり,桟 橋上部工の補修工法として適用可能であること が判明した。

5. まとめ

本研究で得られた知見を以下に示す。 ①印加電圧と防食効果の関係については、4V 程度までは印加する電圧に応じて復極量は比例 的に増加する傾向を示したが、5Vでは影響が ほとんどなく、ロッド長による効果の上限が存 在することが推定できた。

②中央部のみの陽極設置実験から、従来方式で は 100mV 以上の復極量分布を得られたが、上 面設置方式では、これの1/3程度の分布しか 得られなかった。

③この場合,両方式ともに電流密度が負,ある いは零となる分割鉄筋が存在したため,中央1 本陽極では十分な防食効果が期待できなかった。 ④復極量と電流密度の両者の条件を満足する陽 極設置数比率は,従来方式では3,上面設置方 式では5の割合となった。

ロッド長の増大は,設置本数の低減化が図れ る手法と考えられるので今後の研究課題とし, コスト低減対策工法へと展開すると共に外気温 度と防食効果,鉄筋の腐食状況を今回の実験で 追跡調査して行く予定である。

謝辞

本研究を実施するに当たり,実験計画,試験 体設置運搬,結果のまとめにご協力頂いた㈱東 京興業貿易商会の古賀創一郎氏,東興建設㈱の 徳永俊二氏,五洋建設㈱の田中靖之氏に紙面を 借りて深謝致します。

参考文献

- CP工法研究会:コンクリート構造物の電気 化学的補修工法パンプレット,1997
- 山本誠ほか:電気防食による防食電流分布に 関する実験的研究,コンクリート工学年次論 文報告集,Vol.21,No.2,pp1039-1044,1999.7
- 3) ASTM C876Standard Test Method for Half Cell Potentials Of Reinforcing Steel in Concrete, 1980
- 4)田中健一郎ほか:コンクリート構造物に内部 挿入型電極方式を適用した場合の電極配置, コンクリート工学年次論文報告集,Vol.17, No.1,pp913-918,1995.6
- 5)阿部正美ほか:コンクリート中の鉄筋のマク ロ腐食と電気防食によるアノード,カソード へ流入する電流及び分極量,港湾技術研究所 報告,第33巻第2号,1994.6
- 6)土木学会,【2001 年制定】コンクリート標準示 方書 [維持管理編],pp109-111,2001.1

--- 366 ----